２０２３年（令和５年）冬号　No.36

日本ハリストス正教会教団　東日本主教々区宗務局

980-0021　仙台市青葉区中央 3-4-20
Tel (022)225-2744/Fax (022)224-3080
e-mail　orthodox@hyper.ocn.ne.jp

教会学校だより

播(ま)かれた種(たね)

The Eastern Diocese of the Orthodox Church in Japan

聖金ロイオアンによる主の降誕に関する説教

今日、不可解にも父から生まれた方は、私のために、不可解にも処女からお生まれになりました。しかしその時、一方に於いては、彼を生じさせた方がご存じのように、イイススは世の前に父より生まれました。そして今日、聖神の恵みが理解する通り、彼は自然の法則に反して新たに生まれました。彼の高きところでの誕生は真実ですが、低きところでの誕生もまた偽りではなく、彼は神から神として生まれ、処女から人として生まれたのです。

高きに於いては、彼だけが唯一者から生まれた唯一の方であり、低きに於いては、彼だけが処女から生まれた唯一の方です。

彼の高きところでの誕生について、母親を想像することが不敬であるように、低きところでの誕生について、父親を想像することは冒涜です。

父は変化せずに彼を生み、処女は傷付かずに彼を産みました。神は変化させて生むのではなく、神にふさわしい方法で彼を生み、処女は出産に於いて損傷を被りませんでした。彼女は神°的な方法を経て出産したからです。

ですから、高きに於ける神の生まれに説明の余地はなく、後の時代の彼の到来も、不当な分析にさらされてはいけません。私は処女が出産したことを知っており、また、神が時を超えて彼をもうけたと信じているのです。

私は沈黙をもって誕生の業を尊重することを学び、言葉で不当に尋ねないことを受け入れました。なぜなら、神に関することについて、人はその業の構造に注意を払うべきではなく、それをもたらされた方の力を信じるべきだからです。

女性が結婚して出産するときには、自然の法則が必ず伴います。しかし処女が出産した後に、結婚の経験のないまま再び処女として現れるとき、その業は自然を超えています。

自然と合致するものは研究されますが、自然を超えたものは、避けるべきものとしてではなく、言葉では言い表せないものとして、沈黙をもって尊重されるのです。

キャンプだホイ！ in あっさぶ

8月2日(水)から4日(金)にかけて、コロナ禍のために開催が見送られていた「キャンプだホイ！」が実に4年振りに函館管轄の担当にて行われ、会場となった厚沢部町の「ハチャムの森」には、函館、上磯、釧路、帯広、苫小牧、札幌など全道各地から子供5名を含む計33名が集まりました。

一日目は、午後1時に函館教会の聖堂で行われた感謝祈祷から始まりました。続いてオリエンテーションの後、キャンプ場へと向かいましたが、まずは、上磯教会の坂下執事長の農園にてトマトの収穫体験をしました。収穫した沢山のトマトはキャンプ中の食事にサラダとして頂きました。また、道中で立ち寄った「きじひき高原展望台」では、眼下に広がる大沼公園や駒ケ岳と函館山の遠景など大パノラマを楽しみました。

キャンプ場到着後は、恒例の「キャンプだホイ！」の踊りでスタートし、さっそく夕食の準備に取り掛かりました。炭火を起こしてバーベキューを頂き、子供たちはスイカ割りや花火をして、最後はコテージで夕べの祈りをし、一日目を終えました。

二日目は大雨の予報もありましたが好天に恵まれ、ラジオ体操、朝の祈り、朝食の後、午前中は磯遊びとハイキングの2コースに分かれて自然を満喫しました。お昼には昼食会場のカフェに合流してランチを済ませ、温泉に入ってキャンプ場に戻ると、今度は自然の草花やコケを採取してオリジナルのミニ盆栽作り。この日の夕食は子供たちも調理に参加し、カレーライスとカキなどの海鮮バーベキューを頂きました。

三日目の最終日は、朝食の後に昨晩製作したミニ盆栽の表彰式が行われ、名誉村長の篠永神父から各種の賞の発表があり、子供たちには記念品が渡されました。

閉会祈祷後、来年の再開を約束して散会。来年は釧路管轄の担当で帯広地区での開催を予定しています。

教会の奉仕

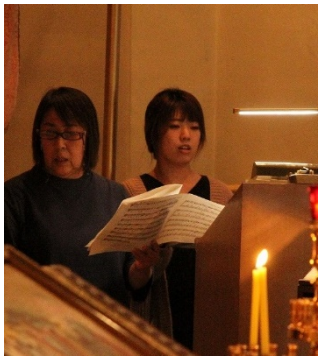
教会への奉仕というと、堂役や聖歌隊、執事会や婦人会などを思い浮かべますが、広い意味では一人ひとりの祈りも、斎も、施しも含めて多岐に及ぶでしょう。いずれも教会のために、また自分の信仰生活を豊かにするためにと思って行われますが、たびたび利己主義に陥って、教会への奉仕を自分の都合の良いものに変じてしまうことはないでしょうか。

私たちはハリストスの肢体として教会に仕えます。個々の信仰生活が世の中に福音の精神を吹き込み、個人の資質も光栄を主に帰する目的で研鑽されることが理想です。体を構成する私たちが互いの理解と従順なる態度に基づいて教会全体の調和と一致を心がけることを忘れては、体調を壊しバランスを崩してしまうでしょう。

ここに、初めて研修会に参加して、自分の学びのみならず、教会との自分の在り方にも思いをめぐらしたアンナ山崎姉の寄稿を紹介します。

聖歌研修会に参加して

上磯教会 アンナ 山﨑 比奈子



9月30日から10月1日にかけて釧路教会で行われた聖歌研修会に参加させていただきました。私は初めての研修会に参加し、講義を通して多くを学びました。また、詠隊員としての自身の未熟な部分を痛感し、今後に生かす為の良い経験を得られました。

これまで奉仕や聖歌を続けさせていただく中で、嬉しかったこと、幸せを感じたことはもちろん数えきれない程ありましたが、正直いくつか葛藤したこともありました。しかし、沢山の方々に今日まで支えられ、様々な教えを得て、恥ずかしながら20歳を過ぎ最近になってやっと、段々と祈りの奥深さや日々の有難みを感じられるようになりました。

私がはじめ聖歌にふれたのは、物心付く前に代式祈祷が行われていた上磯教会を訪れ、右も左も分からないまま見様見真似で参祷し、その後通い続けるうち徐々に歌い始めたことがきっかけでした。それを許して私を受け入れて見守って下さったことが、今にこうして奉仕していることに繋がっています。そのことには感謝してもしきれません。

聖歌を学ぶこと、知ること、実践することは、本当に簡単なことではなく、いつも課題の連続ですが、これからも諸先輩より受け継がれてきたことを、守り、在り続けられるよう、そしていつか私たちが次世代に継承する側になる時のために、今を学ぶことの大切さを、今回の研修会に参加して改めて考えることもできました。

今回共に参加された皆様には、沢山の優しいお言葉を掛けていただき、また聖歌に対する皆様の姿勢を見て、見習わなければと思うこともいくつもありました。この場を借りてお礼申し上げます。私はまだまだ未熟で、皆様に支えて頂きながらにはなりますが、これからも日々研鑽を積んでまいりますので、よろしくお願い申し上げます。

信仰の継承

司祭 エフレム 後藤 悠太

「どのような尊いわざの中でも、一番に聖なるものは子供を教えることである。」
～隠遁者聖フェオファン

イイスス・ハリストスを信じていない人が、信じる者となる、それはある種奇跡のようなものです。その人が信じる者となったきっかけは、人生の大きな転機によるものかもしれません。信仰を持った人の愛に触れて、信じる者となったのかもしれません。あるいは教会に通うようになって、神を受け入れる心の準備が徐々にできてきたのかもしれません。いずれにしろ様々な環境の中で、その人は自らの意思によって、信仰を受け入れる決断をしたのです。しかし、それだけではありません。同時に神様の働きかけがあって、神様の恵みが働いてはじめて、その人は信じない者から信じる者となったのです。

私自身司祭として、未信徒の方に信仰について教える機会が多々ありました。しかしその中で、私自身の中に彼らに信仰を与えることができる、という驕りがあったのではないか、と気づかされることがありました。私自身の力で人を説得して、納得させて人に信仰を持たせることができる、という意識が私の潜在意識の中にあったのです。それが司祭としての責務であるとさえ思っていたのかもしれません。しかし、そこには神様の恵みが入る余地はなく、神様の恵みに対する信頼もありません。私の痛悔しなければいけない点です。

「信仰の継承」ということがたびたび教会で話題になります。上に挙げた聖人のことばにもありますように、子供を神に対する信仰を持つよう導くことはとても尊いことです。家庭の中で様々なことを教える機会があることでしょう。夜寝る前に聖書の物語を教えることもあれば、折に触れてイイススはこのように言っている、と教えることもあるでしょう。教会に行けば、教会の慣習を教えることもあるでしょう。そして何よりも教会へ行くことの大切さを教えることもあるでしょう。そして実際、どれもこれよりも勝る「聖なるもの」はありません。しかし、どのように信仰や信仰生活について教えようとも、私たち自身が自分の力のみに頼って、その子に対して信仰を「持たせる」ことはできません。

しかし、信仰を持つということが神の恵みによるものであるとすれば、私たちは祈ることはできます。いや、むしろ信仰の継承は、祈ることから始まるとすら言えます。子供達が聖神の導きのもとで自分の心を開き、信仰という神様からの無償の賜物を受け入れることができますように、と祈ることから私たちは始めたいのです。

アントニー・コニアリス神父は、家庭で「司祭」の役割を果たしているのは、父親であり、母親である、と書いています。確かに普段からお子さんに接しているのは、教会の神父ではなく、父親であり、母親です。父親や母親がその家庭の司祭として、子供が信仰へ導かれるよう心を砕き、また真摯に祈る時、その子が信仰を受け入れる力を神様は与えてくださるでしょう。

聖体礼儀の啓蒙者の連祷では「願くは彼等も我等とともに、爾父と子と聖神の至尊至栄の名を讃揚せん、今も何時も世世に」と祈っています。一人でも多くの子供たちが信仰を受け入れ、その子供達の神を讃美する声が、私たちの神を讃美する声の輪の中に加えられますよう祈りましょう。

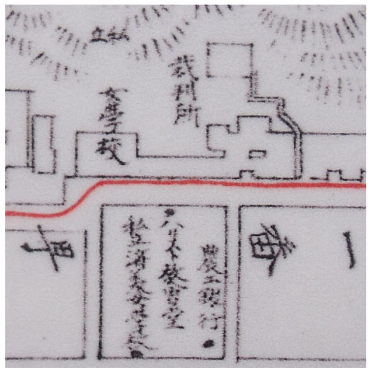
フィラカス・アンゲロス

ダヴィド水口優明：作

「ほら、ここにあるでしょ」

彼の指先は、看板のように立っている地図の中のとある箇所を指していた。

「ほんとだ、へぇ、すごい」



小さな旅行カバンをもったまま、私は、その地図に顔を近づけてまじまじと見入ってしまった。その地図看板は、松山城の西側の黒門口から登る道の傍らに立っている。明治 44 年ごろの松山市の古地図の複写だ。今も県庁の隣にある裁判所が地図に載っており、そして裁判所の前に、その教会の名前が記されている。

「道路拡張があったから、現在の場所をピンポイントで特定するのは難しいけど、今は、ビジネスホテルがある辺りだと思うんだ」

彼のおだやかな口調に引き込まれながら、私が耳にした長い話は次のようなものであった。

今から 120 年ほど前、日露戦争が起きた時、多くのロシア人捕虜が日本に収容された。全国各地に俘虜収容所が設置され、ここ松山にもたくさんの捕虜が連れてこられた。しかし収容所といっても、別に或る特定の家屋に押し込まれて手足を縛られたわけではなく、比較的自由が許され人道的に厚遇されていたらしい。ただし、負傷した者もいたわけで、異国の地で心ならずも死んでしまった者も数多くいた。仲間の死を悼んだ捕虜たちは、その慰霊のために教会堂を建てて欲しいと願い、カンパしあったが、捕虜の身ではすずめの涙ほどしか集まらないのは当然だった。しかし奇跡が起きた。その話を聞いたモスクワの大富豪の奥さんが、松山に聖堂を建てるための資金を全額寄付したのだ。今なら何億円にも及ぶだろう。こうして、松山市の一等地に、その教会がアッという間に建立した。まさしく松山市のド真ん中、一番町にである。当時の海南新聞に大きく取り上げられたり、絵葉書が作られたりした、ということである。

「捕虜たちは喜んだでしょうね」

「ああ。だけど聖堂が建てられたのは日露戦争が終わった後、明治 41 年だったから、生きていた捕虜たちはみんな帰国したんだ。彼等はその聖堂の姿を見ていない」

「そうなんだ。でも何で、今はもう、教会は無くなってしまったのかな」

私たちは肩を並べて、ゆっくりと松山城に向かった。ここから歩いて行くには少し遠いと言われたけど、彼と過ごす時間に何故かしあわせを感じていた私は、そんな距離のことなどどうでもよかった。それよりも彼の声と笑顔と話の内容に惹きつけられていった。

「もちろん、松山のその教会に常住する神父が派遣され、しばらくは通常の祈祷と共に、永眠した捕虜たちのための祈りが捧げられていたんだけど、大正 12 年、東京で悲しい出来事が起きた。関東大震災だ。その時、教会の本部である大聖堂が破損した。屋根が崩れ落ち、飛び火によって内部のものはすべて焼き尽くされた。大聖堂復興のためには時間がかかる。お金もね。その期間も、礼拝は行わなければならない。でも建物がない。そうだ、松山の聖堂を移築しよう、ということになったんだ」

「ええ？　なんで松山なの？」

「まあ、残念ながらそんなに信徒も増えず、松山の教会はある意味小さな教会の規模のままだったし、ちょうど道路拡張のために立ち退きが提案されていたんだ（路面電車が今も走っているのはその道路拡張のおかげ）。その土地を売れば相当のお金が入ってくる、という訳。そうして松山聖堂は、解体され、そのまま東京に運ばれて、再築された」

「で、今も、東京にあるの？」

「いいや、大聖堂が復興した後も、しばらく使用されたんだけど、一度解体再築された建物の老朽化が進むのは早かった。結局、今はもうその姿はなくなってしまった。でも、その中にあったものは、全国のあちこちの教会に送られて、今も生きているんだよ。例えば、秋田県大館市の曲田という所に教会があって、そこは明治 25 年建立の、木造教会としては日本最古の教会堂で、秋田県の文化財に指定されているんだけど、その曲田教会で使われているシャンデリアは、松山の聖堂にあったものなんだ」

「う～ん、それってすごい事だね。松山と秋田が繋がってる」

私たちは、ようやく松山城にたどり着いた。ここから見わたす松山市は非常に美しい。松山城も名城だし、松山と言えば俳句と温泉だとばかり思っていたから、そんな隠れた歴史があるなんて、とても深い物語をもつ所なんだと感じることができた。

「でも、やっぱり、土地を売ったり東京に運んだりしなければ、今もその古い聖堂は松山にあって、そして文化財になってたかもしれないんじゃない？」

「そう思うよね。でも違うんだ。第二次世界大戦の時、ここ松山にも大空襲があったのさ。B29・128 機によって 2 時間 10 分に及ぶ夜間空襲があった。死者・行方不明 259 人、負傷者把握不可の大惨事で、全戸数の凡そ半分が焼失したと言われている。松山聖堂も、もしそこに建ったままだったら、跡形もなく焼けて無くなってただろうね」

私は、再び「戦争」という言葉が出てきたことに胸を塞がれた。なぜ、人は人と戦うんだろう。人は人をそっとやさしく守ってあげるものなんじゃないのかな。でも、人を守るために戦うという矛盾した理屈が現実として人の心の中を流れている。その矛盾はどうやって解消されるのだろう。どうしてこの世は、苦しいこと悲しいことに満ちているのだろう…。実を言うと私も最近、悲しみに心を縛られたばかりなのである。最愛の祖母が亡くなったのだ。あんなに愛してくれたおばあちゃんのことを思うと今でも涙が止まらなくなる。この旅行はその涙をかわかすためという一面もあったが、あまり効果はなかった。もう、世の中から苦しみも悲しみも全部なくなっちゃえばいいのに…。そんなことを考えていたら、彼のまぶしい声が飛びこんできた。

「人間には、どんな苦しみも悲しみも、それを乗り越えることのできる力が与えられるんだよ」

でもこの声は、私の耳にではなく、心の中で聞こえた気がした。この人は私の心が読めるんだろうか、とたじろいだ。しかし、彼は続けて言った。

「これからロープウェイで降りて、坂の上の雲ミュージアムに行ってみよう。それから、さっき言った永眠した

ロシア人捕虜たちのお墓があるから、そこまで連れてってあげようか」
「うれしいけど。でも…」
私は、急に我に帰ったように時間が気になった。今日中に東京に帰らなければならない。飛行機の時間を忘れていた。
「今、何時？」
私はついあつかましくも腕時計をはめている彼の左手に触れようとした。しかし、彼は、私に触れられたくない気持ちがあったのか、サッと私の手をかわした。
「ごめんなさい、つい…」
「いいんだよ。え～と、今、4 時 30 分過ぎだね」
「ええ！？　私、これから松山空港に向かわなければならないの。予約した飛行機に乗り遅れたら大変だわ」
「じゃあ、空港行きのバス停まで送ってあげるよ」
うろたえる私に反して、彼はまったく動じていない。彼の話が長すぎたのだ。それなのに、「ごめん」の一言も、気遣いの言葉もないなんて。さっきまでの感情が少ししぼんでしまった。

実は彼とは、さっき初めて会ったばかりなのである。美術館の前で彼の方から道を尋ねてきたのだ。私は松山に観光で来たのでわからないと答えたのだが、何故か知らず知らずのうちに彼と離れられなくなってしまったのだ。一目惚れとは違う別の何か。初対面なのにいつも一緒にいたと思えるような感覚。思わずタメ口で喋ってしまう親近感。

バス停まで一緒に行って、「ありがとう」と言ってバスの乗車口に片足を載せた時、「しまった、名前を聞くの忘れた」と思い、振り返ったら、もうそこには彼はいなかった。バスから降りて回りを見渡しても彼の後ろ姿はなかった。

飛行機は、やはり飛び立った後だった。私はチケットを次の便に変更してもらえないか尋ねるためカウンターに並んだ。思いのほか混んでいる。空席はあるだろうか、今日中に帰れるだろうか。と、その時だった。近くでざわめきが起こった。人々がテレビ放映のヴィジョンの前に集まっている。
「繰り返し臨時ニュースをお伝えします。松山空港発東京羽田行き ICO1013 便が瀬戸内海上空で何らかのトラブルを起こし、墜落した模様です。まだ乗客の安否は確認されていません」

ICO1013 便、それは私の乗る筈の飛行機だった。真っ青になって立ち尽くす私の目の前に、フェイドインするかのように人の姿をした何かが現れた。それは「彼」だった。でも、「彼」は光っていた。そしてその背中には、大きな翼が広がっていた。

このショートストーリーは「事実を元にしたフィクション」です。すなわち「私」と「彼」と最後の結末は作者によるフィクションですが、語られている松山正教会の歴史そのものはノンフィクションです。「フィラカス・アンゲロス」とはギリシャ語で「守護天使」を意味しています。なお飛行機の便名 ICO1013 は、第一コリント人への手紙 10 章 13 節を示しています。

メタ認知

司祭 ピーメン 松島 拓

「神の知恵」のイコン

最近ビジネス系や教育系の書き物などで「メタ認知」という言葉をよく見かけます。メタ（=上から）の認知という意味で、自分自身の知識、考え方、感情などを客観的に認知し、成長や行動に反映させるという心理学用語だそうです。自身の狭い視野や限られた知識に囚われたり、感情に飲まれたりするのではなく、自分の知恵が限られたものであることや、自分が感情に左右されやすいことを自身で良く知ることで、より有意義に生きることができるという考え方です。

しかしこの「メタ認知」とは決して新しい概念でも何でもなく、古くから「知恵」として伝えられてきたものです。例えば古代ギリシャの哲学者ソクラテスは「自分が何も知らないということを知っていることこそが本当に知恵があるということだ」と主張しました。自分を客観的に見て、「知っていること」「知らないこと」を精査すると、知らないことの方がたくさんあることに気付きます。そして自分には知らないことがたくさんあると自覚するならば、それは自分が知っていることのみをもって「自分は知恵がある」と奢る人間よりよほど知恵があるのだとソクラテスは言います。

また聖書を紐解けば、何も悪いことをしていないのに様々な悲劇に見舞われたイオフ（ヨブ）は「自分の正しさ」と「神から与えられる不当な罰」の間の不合理さに苦しみ困惑しました。しかし神は、彼が「自分は正しい」と信じ切っていること自体を「お前は何も知らないではないか」と叱責します（イオフ記が難しいのは、人間の知恵や倫理のレベルでは確かにイオフは全く無罪なのですが、その人間レベルの論法がそのまま神に通用すると考えているところに彼の問題があるという点です）。私たちが神の前に「知っているつもり」になることはできないということも、一種のメタ認知に繋がることかもしれません。

さて、私たちはしばしば感情的になります。悲しかったり嬉しかったり、それ自体は悪いことではありません。しかし自分を俯瞰する「自分は今悲しんでいるな」「喜んでいるな」という視点を持たないと、私たちはすぐに感情に押し流されて、絶望に陥ったり、逆にはしゃぎ過ぎて調子に乗ってしまったりします。私たちには自分の感情をチェックする視点が必要なのです。あるいは「自分の考えは正しい」「あの人は間違っている」と思う時に「本当にそうだろうか」と問う視点も重要です。「あの人は間違っていると思う自分の考えは本当に正しいのか」と上からの視点で問い直してみると、意外と自分はその事態全体をきちんと知っているわけではないことに気付くし、間違っていると思われる人にもそれなりの事情や根拠があったりすることに気付いたりします。このような「メタな認知」で自分自身を省みることが、冷静な痛悔の心に繋がってくるのでしょう。またとてもではないけれども冷静でいられないほどうろたえている時はどうか。少なくとも「自分は今うろたえていて冷静ではない」と認知できれば、それだけでも事態はほんの少しマシになるのです。

自分自身を客観的に冷静に捉えるのは難しいことです。しかしその視点から自分を見て、本心から自分自身の弱さや小ささ、知恵の乏しさを自覚して初めて私たちは「自分には神の助けと恵みが必要だ」と思えます。冷静な視点から得られた弱さの自覚こそが、逆説的ですが、私たちの信仰的な強さになるのではないでしょうか。